

『事件は暴く為にある。』

ある編集部に一人の男が入社する。

名を河村と言ひ、22〜23歳ぐらゐの若者。

編集部には、黒木編集長を始め、難波、大森、福島、野口、佐伯、吉崎、北川らが仕事をしていた。編集部は、月刊パンチと言ふ雑誌を作っており、B級の大衆雑誌。

緩い空気の仕事をしている記者ばかり。

河村は入社したばかりと言つのに、2週間も編集部に来ない。

それに不満を募らせる編集部一同。

何やら取材をしている様で、どうやら編集長の黒木は何かを知っている様子。

ついに、皆がいる場に姿を現したと思えば、自分が取材した記事を載せて欲しいと言つ。

堪忍袋の緒が切れた一同は河村を責める。

しかし、河村が持ってきた記事に難波は反応する。

難波は、その記事と過去に何らかの関係がある事を臭わす。

それがきっかけで、編集部内で話し合った結果、B級の大衆雑誌から事実を暴くスクープ雑誌と変貌を遂げた。

それから1年の時が過ぎ、忙しい様子の編集部。

河村の過去、難波の過去、黒木の過去が明かされる。

過去に、伊崎という男を追っていた難波。

それにより同僚を亡くすという憂き目に合っていた。

河村の父も、伊崎を追い、それにより社会的地位を失っている。

黒木は、その二つの黒い過去を知っていた。

敵は伊崎にありと確信した二人は、改めて伊崎を追いかける事を決意する。

また1年の時が過ぎ、編集部に伊崎の情報が入ってくる。

それは、伊崎の子会社がある自動車会社との提携を打ち切るといふものだった。

それ以来、注意深く伊崎の動向を追っていると、ある政治家が浮かび上がる。

伊崎との関与を確信した河村と難波は、それを記事に載せる。

しかし、伊崎は盗聴しており、編集部の情報は筒抜けであった。

伊崎に前以て裏工作され、その記事が捏造記事であるとバッシングを受ける。

廃刊の危機に追い込まれ、万事休すの編集部。

最終号、最後の戦いを挑むべく、編集部全員で取材に当たる。

各々が紡ぎだした情報を元に、伊崎の壮大な計画を見破った編集部は最後の月刊パンチを発行する。

伊崎は、その記事が元で、逮捕されたが、月刊パンチ廃刊は免れることができなかった。

誰もいない編集部で空しい表情を浮かべる河村。

そこに難波が訪れる。

難波から聞いたのは、新編集部立ち上げのニュースだった。